

雪渡り

宮沢賢治



雪渡り その一（小狐の紺三郎）

雪がすっかり凍こおつて大理石よりも堅かたくなり、空も冷たい滑なめらかな青い石の板で出来ているらしいのです。

「堅かた雪ゆきかんこ、しみ雪しんこ。」

お日様がまっ白に燃えて百合ゆりの匂においを撒まきちらし又また雪をぎらぎら照あらしました。

木なんかみんなザラメを掛かけたように霜しもでぴかぴかしています。

「堅雪かんこ、凍しみ雪しんこ。」

四郎とかん子とは小さな雪ゆき沓ぐつをはいてキックキックキック、野原に出でました。

こんな面白おもしろい日が、またとあるでしょうか。いつもは歩けな

い黍きびの畑の中でも、すすきで一杯いっぱいだった野原の上でも、すきな方へどこ迄まででも行けるのです。平らなことはまるで一枚の板です。そしてそれが沢山たくさんの小さな小さな鏡のようにキラキラキラキラ光るのです。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」

二人は森の近くまで来ました。大きな柏かしわの木は枝えだも埋うずまるくらい立派な透すきとおった氷柱つららを下げ、重そうに身体からだを曲げて居おりました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。狐の子あ、嫁よめほしい、ほしい。」と二人は森へ向いて高く叫さけびました。

しばらくしいんとしましたので二人はも一度叫さけぼうとして息をのみこんだとき森の中から

「凍み雪しんしん、堅雪かんかん。」と云いいながら、キシリキシ

り雪をふんで白い狐の子が出て来ました。

四郎は少しぎよつとしてかん子をうしろにかばって、しつかり足をふんばって叫びました。

「狐こんこん白狐、お嫁ほしけりや、とつてやろよ。」

すると狐がまだまるで小さいくせに銀の針のようなおひげをピンと一つひねって云いました。

「四郎はしんこ、かん子はんこ、おらはお嫁はいらないよ。」
四郎が笑って云いました。

「狐こんこん、狐の子、お嫁がいらないきや餅もちやろか。」

すると狐の子も頭を二つ三つ振ふって面白そうに云いました。

「四郎はしんこ、かん子はんこ、黍の団子をおれやろか。」

かん子もあんまり面白いので四郎のうしろにかくれたままそつと歌いました。

「狐こんこん狐の子、狐の団子は兎うさぎのくそ。」

すると小狐紺三郎が笑つて云いました。

「いいえ、決してそんなことはありません。あなた方のような立派なお方が兎うさぎの茶色の団子なんか召めしあがるもんですか。私らは全体いままで人をだますなんてあんまりむじつの罪をきせられていたのです。」

四郎がおどろいて尋たずねました。

「そいじやきつねが人をだますなんて偽うそかしら。」

紺三郎が熱心に云いました。

「偽ですとも。けだし最もひどい偽です。だまされたという人は大抵たいていお酒に酔よつたり、臆病おくびょうでくるくるしたりした人です。面白面白いですよ。甚兵衛じんべえさんがこの前、月夜の晩私たちのお家うちの前すわに坐すわつて一晩じようるりをやりましたよ。私らはみんな出て見

たのです。」

四郎が叫びました。

「甚兵衛さんならじょうりじやないや。きつと浪花なわぶしだぜ。」

子狐紺三郎はなるほどという顔をして、

「ええ、そうかもしれませんが。とにかくお団子をおあがりなさい。私のさしあげるのは、ちゃんと私が畑を作つて播まいて草をとつて刈かつて叩たたいて粉にして練つてむしてお砂糖をかけたのです。いかがですか。一皿さらさしあげましょう。」

と云いました。

と四郎が笑つて、

「紺三郎さん、僕らは丁度いまね、お餅をたべて来たんだからおなかが減らないんだよ。この次におよばれしようか。」

子狐の紺三郎が嬉うれしがつてみじかい腕うでをばたばたして云いま

した。

「そうですか。そんなら今度げんとろうかい幻燈会げんとろうかいのときさしあげましょう。幻燈会にはきつといらつしやい。この次の雪の凍った月夜の晩です。八時からはじめますから、入場券をあげて置きましょう。何枚あげましょうか。」

「そんなら五枚お呉くれ。」と四郎が云いました。

「五枚ですか。あなた方が二枚にあとの三枚はどなたですか。」と紺三郎が云いました。

「兄さんたちだ。」と四郎が答えますと、

「兄さんたちは十一歳以下ですか。」と紺三郎が又尋ねました。

「いや小兄ちいにいさんは四年生だからね、八つの四つで十二歳。」と四郎が云いました。

すると紺三郎は尤もつともらしく又おひげを一つひねって云いまし

た。

「それでは残念ですが兄さんたちはお断わりです。あなた方だけいらつしやい。特別席をとつて置きますから、面白いんですよ。幻燈は第一が『お酒をのむべからず。』これはあなたの村の太右衛門さんと、清作さんがお酒をのんでとうとう目がくらんで野原にあるへんてこなおまんじゅうや、おそばを喰べようとした所です。私も写真の中にうつつています。第二が『わなに注意せよ。』これは私共のこん兵衛が野原でわなにかかったのを画いたのです。絵です。写真ではありません。第三が『火を軽べつすべからず。』これは私共のこん助があなたのお家へ行つて尻尾を焼いた景色です。ぜひおいで下さい。」

二人は悦んでうなずきました。

狐は可笑しそうに口を曲げて、キツクキツクトントンキツク

キックトントンと足ぶみをはじめてしつぽと頭を振ってしばらく考えていましたがやっと思いついたらしく、両手を振って調子をとりながら歌いはじめました。

「凍^しみ雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のまんじゅうはポツポツポ。

酔ってひよろひよろ太右衛門が、

去年、三十八、たべた。

凍み雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のおそばはホッホッホ。

酔ってひよろひよろ清作が、

去年十三ばいたべた。」

四郎もかの子もすっかかり釣^っり込^こまれてもう狐と一^{いっしよ}緒に踊^{おど}つて
います。

キツク、キツク、トントン。キツク、キツク、トントン。キツク、キツク、キツク、トントン。

四郎が歌いました。

「狐こんこん狐の子、去年狐のこん兵衛が、ひだりの足をわなに入れ、こんこんばたばたこんこん。」

かん子が歌いました。

「狐こんこん狐の子、去年狐のこん助が、焼いた魚を取るとしておしりに火がつききやんきやんきやん。」

キツク、キツク、トントン。キツク、キツク、トントン。キツク、キツク、キツク、トントン。

そして三人は踊りながらだんだん林の中にはいつて行きました。赤い封蠟ふうろう細工のほおの木の芽が、風に吹かれてピツカリピツカリと光り、林の中の雪には藍色あいいろの木の影がいちめん網あみになつ

て落ちて日光のあたる所には銀の百合ゆりが咲いたように見えま
した。

すると子狐紺三郎が云いました。

「鹿しかの子もよびましようか。鹿の子はそりや笛ふえがうまいん
ですよ。」

四郎とかん子とは手を叩いてよろこびました。そこで三人は
一緒に叫びました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ、鹿しかの子あ嫁いほしいほしい。」
すると向うで、

「北風ぴいぴい風三郎、西風どうどう又三郎」と細いいい声
がしました。

狐の子の紺三郎がいかにもばかにしたように、口を尖とがらして
云いました。

「あれは鹿の子です。あいつは臆病ですからとてもこつちへ来そうにありません。けれどもう一遍いっぺん叫んでみましようか。」

そこで三人は又叫びました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ、しかの子あ嫁よめほしい、ほしい。」
すると今度はずうつと遠くで風の音か笛の声か、又は鹿の子の歌かこんなように聞えました。

「北風ぴいぴい、かんこかんこ

西風どうどう、どつこどつこ。」

狐きつねが又ひげをひねって云いました。

「雪が柔やわらかになるといけませんからもうお帰りなさい。今度月夜に雪が凍つたらきつとおいで下さい。さっきの幻燈をやりますから。」

そこで四郎とかん子とは

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」と歌いながら銀の雪を渡つておうちへ帰りました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」

雪渡りゆきわた その二（狐小学校の幻燈会）

青白い大きな十五夜のお月様がしずかに氷ひの上かみやまから登りました。

雪はチカチカ青く光り、そして今日も寒水石かんすいせきのように堅かたく凍こおりました。

四郎は狐の紺三郎との約束やくそくを思い出して妹のかん子にそつと云いました。

「今夜狐の幻燈会なんだね。行こうか。」

するとかん子は、

「行きましたよう。行きましたよう。狐こんこん狐の子、こんこん狐の紺三郎。」とはねあがつて高く叫さけんでしまいました。

すると二番目の兄さんの二郎が

「お前たちは狐のそこへ遊びに行くのかい。僕ぼくも行きたいな。」と云いました。

四郎は困ってしまったて肩かたをすくめて云いいました。

「大兄おおにいさん。だって、狐の幻燈会は十一歳までですよ、入場券に書いてあるんだもの。」

二郎が云いました。

「どれ、ちよつとお見せ、ははあ、学校生徒の父兄にあらずして十二歳以上の来賓らいひんは入場をお断わり申し候そう、狐なんて仲々うまくやってるね。僕はいけないんだね。仕方ないや。お前たち

行くんならお餅もちを持って行つておやりよ。そら、この鏡餅がい
いだろう。」

四郎とかん子はそこで小さな雪沓ゆきぐつをはいてお餅をかついで外
に出ました。

兄弟の一郎二郎三郎は戸口に並ならんで立つて、

「行つておいで。大人の狐にあつたら急いで目をつぶるんだよ。
そら僕ら囃はやしてやろうか。堅雪かんこ、凍しもみ雪しんこ、狐の子あ
嫁よめいほしいほしい。」と叫びました。

お月様は空に高く登り森は青白いけむりに包まれています。
二人はもうその森の入口に来ました。

すると胸にどんぐりのきししょうをつけた白い小さな狐の子が
立つて居て云いました。

「今晚は。お早うございます。入場券はお持ちですか。」

「持っています。」一人はそれを出しました。

「さあ、どうぞあちらへ。」狐の子が尤もらしくからだを曲げて眼をパチパチしながら林の奥を手に教えました。

林の中には月の光が青い棒を何本も斜めに投げ込んだように射して居りました。その中のあき地に二人は来ました。

見るともう狐の学校生徒が沢山集って栗の皮をぶつつけ合ったりすもうをとったり殊におかしいのは小さな小さな鼠位の狐の子が大きな子供の狐の肩車に乗ってお星様を取ろうとしているのです。

みんなの前の木の枝に白い一枚の敷布がさがっていました。不意にうしろで

「今晚は、よくおいででした。先日は失礼いたしました。」という声がしますので四郎とかん子とはびっくりして振り向いて見

ると紺三郎です。

紺三郎なんかまるで立派な燕尾服えんびふくを着て水仙すいせんの花を胸につけてまっ白なはんけちでしきりにその尖とがったお口を拭ふいているのです。

四郎は一寸ちよつとお辞儀じぎをして云いました。

「この間は失敬。それから今晚はありがとう。このお餅をみなさんであがって下さい。」

狐の学校生徒はみんなこつちを見ています。

紺三郎は胸いっばいを一杯に張いたってすまして餅を受け取りました。

「これはどうもおみやげを戴いたいて済みません。どうかごゆるりとなすって下さい。もうすぐ幻燈もはじまります。私は一寸失礼いたします。」

紺三郎はお餅を持って向うへ行きました。

狐の学校生徒は声をそろえて叫びました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ、硬いお餅はかつたらこ、白いお餅はべつたらこ。」

幕の横に、

「寄贈、お餅沢山、人の四郎氏、人のかん子氏」と大きな札が
出ました。狐の生徒は悦んで手をパチパチ叩きました。

その時。ピーと笛が鳴りました。

紺三郎がエヘンエヘンとせきばらいをしながら幕の横から出
て来て丁寧にお辞儀をしました。みんなはしんとなりました。

「今夜は美しい天気です。お月様はまるで真珠のお皿です。お
星さまは野原の露がキラキラ固まったようです。さて只今から
幻燈会をやります。みなさんは瞬やくしやみをしないで目をま
んまろに開いて見ていて下さい。」

それから今夜は大切な二人のお客さまがありますからどなたも静かにしないといけません。決してそつちの方へ栗の皮を投げたりしてはなりません。開会の辞です。」

みんな悦んでパチパチ手を叩きました。そして四郎がかん子にそつと云いました。

「紺三郎さんはうまいんだね。」

笛がピーと鳴りました。

『お酒をのむべからず』大きな字が幕にうつりました。そしてそれが消えて写真がうつりました。一人のお酒に酔よった人間のおじいさんが何かおかしな円いものをつかんでいる景色です。

みんなは足ぶみをして歌いました。

キツクキツクトントンキツクキツクトントン

凍み雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のまんじゅうはぽっぽっぽ

酔ってひよろひよろ太右衛門が

去年、三十八たべた。

キックキックキックキックトントン

写真が消えました。四郎はそつとかん子に云いました。

「あの歌は紺三郎さんのだよ。」

別に写真がうつりました。一人のお酒に酔った若い者がほお
の木の葉でこしらえたお椀わんのようなものに顔をつつ込こんで何か
喰たべています。紺三郎が白い袴はかまをはいて向うで見ているけしき
です。

みんなは足踏あしぶみをして歌いました。

キックキックトントン、キックキック、トントン、

凍み雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のおそばはぽっぽっぽ、

酔ってひよろひよろ清作が

去年十三ばい喰べた。

キック、キック、キック、キック、トン、トン、トン。

写真が消えて一寸ちよつとやすみになりました。

可愛らしい狐の女の子が黍団子きびだんごをのせたお皿を二つ持って来

ました。

四郎はすっかり弱ってしまいました。なぜってたった今太右衛門と清作との悪いものを知らないで喰べたのを見ているのですから。

それに狐の学校生徒がみんなこつちを向いて「食うだろうか。ね。食うだろうか。」なんてひそひそ話し合っているのです。か
ん子ははずかしくしてお皿を手に持ったまま真っ赤になってしま

いました。すると四郎が決心して云いました。

「ね、喰べよう。お喰べよ。僕は紺三郎さんが僕らを欺すなんて思わないよ。」そして二人は黍団子をみんな喰べました。そのおいしいことは頬つぺたも落ちそうです。狐の学校生徒はもうあんまり悦んでみんな踊りあがってしまいました。

キックキックトントン、キックキックトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり、

たとえばからだを、さかれても

狐の生徒はうそ云うな。」

キック、キックトントン、キックキックトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり

たとえこごえて倒れても^{たお}

狐の生徒はぬすまない。」

キツクキツクトントン、キツクキツクトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり

たとえからだがちぎれても

狐の生徒はそねまない。」

キツクキツクトントン、キツクキツクトントン。

四郎もかん子もあんまり嬉^{うれ}しくて涙^{なみだ}がこぼれました。

笛がピーとなりました。

『わなを軽べつすべからず』と大きな字がうつりそれが消えて
絵がうつりました。狐のこん兵衛^{べえ}がわなに左足をとられた景色
です。

「狐こんこん狐の子、去年狐のこん兵衛が
左の足をわなに入れ、こんこんばたばた

こんこんこん。」

とみんなが歌いました。

四郎がそつとかん子に云いました。

「僕の作つた歌だねい。」

絵が消えて『火を軽べつすべからず』という字があらわれま
した。それも消えて絵がうつりました。狐のこん助が焼いたお
魚を取ろうとしてしつぽに火がついた所です。

狐の生徒がみな叫びました。

「狐こんこん狐の子。去年狐のこん助が

焼いた魚を取るとしておしりに火がつき

きやんきやんきやん。」

笛がピーと鳴り幕は明るくなつて紺三郎が又出て来て云いました。

「みなさん。今晚の幻燈はこれでおしまいです。今夜みなさんは深く心に留めなければなりません。それは狐のこしらえたものを賢いすこしも酔わない人間のお子さんが喰べて下すつたという事です。そこでみなさんはこれから、大人になつてもうそをつかず人をそねまず私共狐の今迄の悪い評判をすつかり無くしてしまふだろうと思ひます。閉会の辞です。」

狐の生徒はみんな感動して両手をあげたりワーツと立ちあがりました。そしてキラキラ涙をこぼしたのです。

紺三郎が二人の前に来て、丁寧におじぎをして云いました。

「それでは。さようなら。今夜のご恩は決して忘れません。」

二人もおじぎをしてうちの方へ帰りました。狐の生徒たちが

追いかけて来て二人のふところやかくしにどんぐりだの栗だの青びかりの石だのを入れて、

「そら、あげますよ。」「そら、取って下さい。」なんて云つて風のように逃げ帰つて行きます。

紺三郎は笑つて見ていました。

二人は森を出て野原に行きました。

その青白い雪の野原のまん中で三人の黒い影^{かげ}が向うから来るのを見ました。それは迎^{むか}いに来た兄さん達でした。

雪渡り

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成 2）年 5 月 25 日発行

1997（平成 9）年 5 月 10 日 17 刷

初出：「愛国婦人」

1921（大正 10）年 12 月号、1922（大正 11）年 1 月号

入力：土屋隆

校正：田中敬三

2006 年 3 月 22 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。